



変えるべき
ところは変え、
残すべきところは
そのまま。

ホテルの前の潮だまりは、誰もが一度は水遊びしたことのある遠浅の海だ。まさに岬の突端にあるホテルの客室から見るだるま朝日を、友だちに見せたいと願った。

旅行が好きで夫婦で日本中あちこち行っただが、太平洋側で室戸より良いロケーションはない、うまい魚や野菜もないと確信している。「泊まる場所がないから素通りされる。廃業するなら自分がやろう」とこの夏から、岬観光ホテルを経営することになった。千頭善孝・利智夫妻は、とにかく室戸に惚れている。

創業53年のタイヤショップの2代目。妻は、現役のジオガイドでもある。「8か所ある中でも、日本一ジオをうたえる場所だと思う。地形を見て、石に触って匂いをかぐ。室戸は五感で体験出来る場所」。

本館は、もとは個人の別荘として建てられた洋館。レトロな宿と、その風情を愛するファンも多い。昭和8年の建築だから傷みもある。それでも変わらないのは、目の前の絶景だ。

古い写真では、海からもはっきり建物が見えている。そこでまずは、伸び放題で遊歩道をおおう草木を整備したいと考えている。

「当初は1階からも海が見えたんです。ところが台風が来なくなって森ようになった。外来種も増えて、このままではシオギクが全滅してしまう」と危惧している。もっと多くの人に室戸の魅力を伝えたいから。「保護と放置は違う」。そのひとことに、覚悟が見える。

岬観光ホテル
千頭善孝・利智

室戸 じと、 進む。